

渡辺復興大臣 経済同友会訪問ぶら下がり会見録
(平成31年3月12日(火) 10:32~10:36於) 日本工業倶楽部)

1. 質疑応答

(問) 今日はどうなお話をされていましたか。

(渡辺復興大臣) 私が経済同友会に、まずはお礼を申し上げたんですね。それはなぜかと申し上げますと、経済同友会には復興庁に人を派遣していただいております。この人の力というのは大変大きいものがありますので、これは本当にありがたいことでもあります。このお礼と、そして引き続きの派遣をお願い申し上げました。さらには、経済同友会は、当然のことながら企業の集まりであります。復興庁の支援事業で、被災している地域の企業と結びつける「結の場」があります。そこで多くのマッチング事業が進められていることに対しても引き続きお願いをしていきたいということ。

もう一点、風評の関係、福島風評ですね。いかに風評を払拭するかという中で、やはり経済同友会の会員企業の皆さん方には、例えば、社員食堂とか、そういったところで福島県産品お使いいただきたいと、現にお使いいただいているところもあるようでございますが、こういったものを今後も引き続きお願いをしたいということ、代表幹事にお話をさせていただきました。

(問) 震災から8年たちましたけれども、やっぱり復興に向けて、産業界、経済界の力も大きいということでしょうか。

(渡辺復興大臣) はい。まずは産業の生業が本当にできているかということ、私たちはしっかりと見ていかなければなりません。その上で、産業の生業がまだ道半ばであるという感じはします。これを、やはりもとのようにするには、やはり時間が必要になるなというふうに感じております。

(問) 経済界、経営者の代表として、そういうお声をどういうふうに受け止めていらっしゃるでしょうか。

(小林代表幹事) 今日のまずお話は、経済同友会は、震災の3月11日以降、すぐ「震災復興プロジェクトチーム」というのを立ち上げて、7月には「I P P O I P P O N I P P O N」という形で、会社なり、個人のお金を集めて、21億8,000万円ぐらい集まったんですけども、それで、とにかく早く、専門高校でなくなってしまった教育資材、そういったものを調達しようというのをメインにやりまして、大学も一部入っていますが、そういうところで協力をしたと。あるいは女川町の復興支援、これは人も出た。あるいは復興支援プロジェクトという形で、この間、長い間、もう8年にわたって非常にフェーズは変わってきましたんですが、例えば、Jヴィレッジから行ったんですが、1Fなんかでは、最初は

とんでもない防護服を着ていましたが、今は、薄手の防護服を着れば直接行けるようになっていて、時間はかかっているとはいえ、着々と、よくなっている部分もありますし、Jヴィレッジもついにサッカーの試合ができるようになった。

ただ、そうは言っても、まだ廃炉が30年、50年のオーダーでやっていかなきゃいかん。この辺は民間企業で相当協力できるどころですし、あるいは個別の中小、中堅企業とも、あるいは大学も含めて、産学官でいろいろなプロジェクトといたしますか、この間、仙台のシンポジウムをずっと続けると同時に、そういう作業もやっていますし、高校に行って、高校生がつくった缶詰とか、そういうのを、我々も試食させてもらってというような細かい作業から大きな大プロジェクトまで。

それで、最後、同友会の方からの要望としては、やっぱりILCという、インターナショナル・リニア・コライダー、こういった形のあるプロジェクトが要るんじゃないかと。福島イノベーション・コースト構想が具体的には進んでいるとはいえ、やはり東北のイノベーションをベースにした新しい復興という形。この辺を是非、国としても、我々と一緒に考えていただければというようなお話をいたしました。

(問) 大臣、今、代表幹事がお話ししたILCについては、どのようにお考えですか。

(渡辺復興大臣) 基本的には、文部科学省、日本学術会議の方で方向性を決めて、それで文科省の方で、引き続きそれは検討するという話になっていますね。これは私ども復興庁としても、文科省の対応に、しっかりと応援をしていきたいというふうに思っております。

個人的には、今日は震災復興プロジェクト委員長の木村さんにかなり説得されまして、その方向が大分こっちに、言われたかなという感じはしますけどね、ILCの技術ができれば本当に素晴らしいというふうに思いますし、何しろ人が必然として来るのが大事なんです。必然性がないとだめなんです。ここを何とかしたいですね。

(以 上)